Ⅳ－22　ブラジルにおける日本人移住地の建設に関する史的研究

岩手大学工学部　正会員　安藤　昭
岩手大学工学部　正会員　赤谷　隆一
岩手大学工学部　○学生員　栗谷川克寛

１．はじめに

ブラジルは1822年にポルトガルから独立した国であり、その歴史は浅い。ブラジルの急激な人口増加は、主としてこの独立後のヨーロッパからの大量の移民の流入が始まりであり、都市形成史においてはこの時代の移民が建設した移住地を起源として発展した都市、移民都市が多い。この移民都市は、建設の主体となった移民の文化の違いにより、都市の立地、構造等の点において大きく異なる。

本研究は、ブラジルの今後の都市建設のうえで少なからず影響を及ぼすと考えられるドイツ人移民都市と日本人移住地をとりあげ、都市の形成過程を比較考察するものである。

２．ヨーロッパ人の移住地建設とその展開（ドイツ人移民の場合）

ドイツ人移民の都市形成期はブラジル独立後の1820年代から1900年にかけてであり、移住初期においてはブラジル南部への移住が始められた。これはブラジルの皇帝が、当時まだ未開拓の地域であった南部へスペイン人の勢力拡張の脅威から、その防衛を目的として誘致を行なったものである。つまりバーイアBahia州にいたドイツ移民を再移住させ、南リオ・グランデRio Grande do Sull州にサン・レオポルドSão Leopoldo移住地を開設したり、サンタカタリナSanta Catarina州のアルカンタラAlcantaraにドイツ移民を入植させたものである。当地では次第にドイツ人による自営開拓移住地建設の動きが起こり、なかでもサンタカタリナ州の開発が盛んに行なわれた。1850年にはイタジャイー川河口から90kmの地点にブルメナウBlumenau、1851年にはサンフランシスコ港の背後の低湿地にジョインヴィーレJoinville、1860年にはイタジャイー川の支流にブルスケBrusqueなどが建設された。一方、サンパウロ州ではコーヒー農場の契約労働者（コロノ移民）として移住するが、労働条件がひどかったため、ドイツ政府は1856年にコロノ移民の送り出しを停止している。また他のヨーロッパ人移民においても、自営開拓移住地建設の動きが起こるが、それらの移住地はドイツと同じ南部三州へ建設された。ドイツ人移住地建設の特色は移住の制約条件の比較的少ない南部三州に、自由な土地選定の下で行なわれたことである。

表－１　外国人移住地建設年表

年代		事　　項
1818	ブラジル政府の援助による移住地建設期	（欧）スイスのフリブルグ出身の移民１０８５名がリオでジャネイロ州のカンタガーロに入植する。この移住地はのちにノーヴァ・フリブルゴ移住地と命名される。
		（独）少数のドイツ移民が取扱業者の手でバーイア州のサンタレオポルディーナ移住地を開拓する。
1824		（独）皇帝ドン・ペードロＩ世がサンタレオポルディーナ移住地の移民を再移住させ、南リオグランデ州にサン・レオポルド移住地を開設する。
1827		（独）ドイツのブレーメン出身の移民がリオ・ネグロ移住地を開設する。
		（独）３３６名のドイツ移民が現在のサンパウロ市付近のサント・アマーロ、イタペセリカに入植する。
1829		（独）サンタカタリナ州のアルカンタラに１４６世帯のドイツ移民が入植する。
1836		（伊）サンタカタリナ州にイタリア人移住地ノーヴァ・イタリア植民地が創立する。
1847		（仏）パラナ州にフランス人移民がイヴァイー川流域のテレーザ・クリスティーナに入植する。
1850	ヨーロッパ人の自営開拓移住地建設期	（独）サンタカタリナ州のイタジャイー川河口から９０キロの地点にドイツ人移住地ブルメナウが創立する。
1851		（独）サンタカタリナ州サンフランシスコ港の背後の低地にドイツ人移住地ジョインヴィーレが創立する。
1856		（独）ドイツ（プロシア）政府がコロノ移民の送出を停止する。
1860		（独）サンタカタリナ州にドイツ人移住地ブルスケが創立する。
1870		（欧）バーイア州イリェーオス付近のココア
		（伊）この頃から１８９０年にかけて、南リオグランデ州の現在のアルフレドシャベスやカシアスにイタリア人が移住地を建設する。
1873		農場にドイツ人、ポーランド人約１８００名の集団が配置されるが、風土病により死亡者が続出、大部分は帰国し一部は南部に再移住する。
1874		（伊）イタリアから初めてコロノ移民が導入される。
1876		（欧）パラナ州政府は現在のクリチーバにイタリア人とポーランド人を導入し、市街地周辺の農場開拓や道路建設を始める。
1885		（独）この頃からドイツ人がジョインヴィーレからパラナ州への進出を始める。
1890		（欧）この頃からクリチーバ周辺に土地会社や州政府の援助で多くの開拓地が計画・設立する。
		（独）サンタカタリナ州にドイツ人移住地ハンザ・ハモニア植民地（現イビラーマ）が創立する。
1898		（欧）約５万人のポーランド人がパラナ州に入り、開拓を始める。

３．日本人の移住地建設とその展開

日本人の移住は1908年に始まり、初期においてはそのほとんどがコーヒー農場の契約労働者（コロノ移民）であった。しかし日本人移民においても、ヨーロッパ移民の例に漏れず

次第に自営開拓移住地の建設が、主に国策会社の手によって始められた。まず、1913年に東京シンジケートがサンパウロSão Paulo州南部海岸リベイラ河流域にレジストロ移住地を建設したのを始め、サンパウロ州北部には1924年に信濃海外協会がアリアンサ移住地を、1928年にはブラジル拓殖組合がバストスBastos移住地、1929年にはチェテーTiete移住地、1932年にはパラナParana州の北部にトレス・バーラス移住地を建設した。

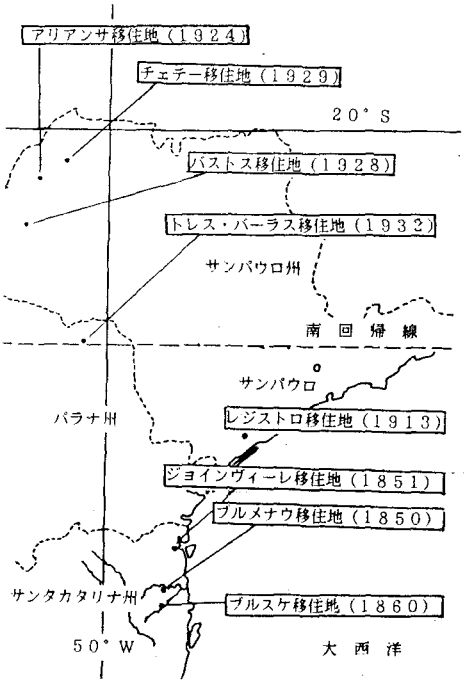
		（欧）この頃からパラナ州の現在のポンタ・グロッサ周辺にロシア人とポーランド人、ドイツ人の開拓地ができる。
1902		（伊）イタリア政府がコロノ移民の送出を停止する。
1908		（日）日本人の移住が開始される。
1913		（日）サンパウロ市付近リベイラ川流域に日本人自営開拓移住地レジストロ移住地の開拓が始まる。
		（日）レジストロ移住地に隣接して桂植民地が創立される。
1915		（日）パウリスタ本線プレジテンテベンナ駅付近に平野植民地の開拓が始まる。
1918	日本人の自営開拓移住地建設期	（日）上塚植民地の開拓が始まる。
1919		（日）レジストロ移住地に隣接して、海外興業株式会社がセッテ・バーラス移住地を開設する。
1924		（日）長野県「信濃海外協会」が第一アリアンサの土地２，２００アルケールの土地を購入する。
		（日）第二アリアンサ１，２００アルケールの土地が購入される。
1927		（日）サンパウロに財団法人ブラジル拓殖組合が設立する。
		（日）第三アリアンサ移住地１，３００アルケールの土地が生まれる。
1928		（日）海外移住組合連合会によってバストス移住地１２，０００アルケールの土地が購入される。
		（日）ブラジル拓殖組合がチェテー移住地の土地売買契約を結ぶ。
1929		（日）ブラジル拓殖組合の所有地としてチェテー移住地の土地４６６９０アルケールが登記される。
		（日）バストス移住地に隣接地９３２アルケールが追加購入される。
1932		（日）ブラジル拓殖組合によってパラナ州北部に１８，３４０アルケールのトレス・バーラス移住地が創立する。

注）１アルケール＝２．４２ヘクタール

4．ドイツ人・日本人移住地の比較考察

ドイツ人移民都市としてブルメナウ、日本人移住地としてバストスをとりあげてみる。まずブルメナウは1850年にドイツの軍医ヘルマン・ブルメナウ氏によって創立されたものであり、彼の移住地選定理由がイタジャイー川の地形がドイツ本国のライン川に似ていたからだと言われている。おそらく彼はライン川において行なわれていた河川交通を想定し、新天地であるブラジルにおいてもそれを試みようとしたことがうかがえる。農業においてもヨーロッパ式を取り入れ、住居もドイツ風の建築様式で造られ今なお現存している。ブルメナウは創立者個人の思い入れや自我といわれるものが移住地の選定条件・生活様式等によく表れており、決してブラジルに順応すること無く、新天地での「理想郷」を求めたのではないかと考えられる。

一方、日本人移住地バストスであるが、これは1928年に海外移住組合連合会によって土地が購入され、ブラジル拓殖組合の経営による移住地である。バストスをはじめこの頃の自営開拓移住地はサンパウロ州・パラナ州の北部に建設され、しかも鉄道建設の最前線に位置している。この理由はバストスははじめからコーヒー栽培に適した場所を選び、コーヒーを売ることによって移住地の経営を企画した、いわば企業的性格をもった移住地であったことによる。バストスは10アルケール（１アルケール＝2.42ヘクタール）を単位とし、資金を持った者（ブラジル在住者あるいは日本からの直来社）がこれを購入し、コーヒーを主産業としている。また最初に建てられた建物は街のシンボルとしての教会であり、その信徒は日本を出港するときに、強制的、機械的に洗礼を受けさせられた人々であった。　市街地は格子状の街路構造をなし、通りにはすべて名称が付けられるなど、欧米の都市の構造を模したものであった。都市は主体としての住民が快適に感ずる環境を育成することが大切であるが、建設当初のバストスは強制的にブラジルへの同化策が採られたと言えよう。



図－１　日本人とドイツ人の主な移住地
（　）内は建設年